東日本大震災に思うこと
～阪神・淡路大震災を振り返って

伍　芳

二〇一一年一二月、阪神淡路大震災の復興を祈念して行われてきた光の祭典「神戸ルミナリエ」は一七回目を迎えました。この年も、震災で亡くなった姉の遺影を胸に抱いて会場を訪れました。長蛇の列に並び、ゆっくりと歩みを進みながら会場の通りに入る最後の角を曲がったとき、ルミナリエの光がまぶしく目を射しました。それまでと同じ間隔で光のオブジェは並び、通りに流れるＢＧＭは何のためらいもなく人々に降り注いでいました。しかし何かが違う。私は直感的にそれを悟りました。芸術家は、精神の有り様を見事に色や形や音楽にして、鑑賞する人の心の深層に再現します。震災から一五年が経過したこの年のルミナリエのテーマは「希望の光」でした。様々な色の電球は、作者の巧みな技によって組み合わされて光のオブジェとなり、思惑通りのメッセージを来場者に伝えているようでした。

人ごみの中でふと周りを見渡すと、温かい光に包まれた人々の笑顔がはっきりと目に映りました。そのとき一瞬、私は時空の束縛から解き放たれました。見物客の隙間を縫って、姉を探していました。「もう、

勝手に行ってしまって」とつぶやきながら、姉の後姿を追いかけました。先に進むほど人混みが増し、やがて進めなくなってはじめて現実に引き戻されました。姉はもうここにはいない、ここだけでなく世界中どこを探してももういないのだと。

「おねえちゃんが、忘れられる・・・」

「希望の光」を発するオブジェの足元で泣き崩れました。

姉の伍鳴（ウーミン）は私より五歳年上で、笑顔がかわいい明るく思いやりのある少女でした。勉強もよくできて、小学四年生からは英才教育で知られる上海外国語学院付属小学校に編入し、そこで高校までドイツ語を専攻していました。寮制度の学校で、きっと寂しい時もあったと思いますが、気丈な姉はいつしかクラスのリーダー的な存在になっていました。高校一年の時、学校を代表してドイツで開催された世界子供交流活動に参加することになり、約一か月間ドイツ人の家庭でホームステイを体験しました。上海に戻った姉は世界がいかに大きいか、目を輝かせながら語っていました。その時の経験は、その後の姉の人生を大きく変えることになります。

ある日、日本からの日中友好団体が姉の学校を訪問することになり、日本人団長の案内役として姉が選ばれました。姉は英語も得意で、流暢な英語で的確に案内をこなす姉は友好団体から称賛を浴びました。そんな姉を団長がとても気に入り、日本に来て才能を活かさないかお誘いをいただきました。幾度となく姉は両親と話し合ったようですが、世界へ一歩を踏み出したいという強い思いを抱いていた姉は、結果的

に高校卒業後日本へ留学する道を選びました。

一九八六年の秋から日本に留学した姉は関西国際学友会日本語学校で一年余り日本語などを学び、一九八八年の春に京都大学経済学部に入学しました。それをきっかけに姉は、京都での下宿生活を始めました。明るい性格と語学の才能を活かし、姉はすぐに日本での生活にも馴染み、多くの日本の友人に恵まれました。

ある日、姉は「日本に遊びに来ないか」と電話をしてきました。その頃私は上海音楽学校在学中の高校一年生で、中国民族楽器古箏を専攻しており、日々練習に励んでいました。日本の琴について少しは知識がありましたが実物に触れたことはないので、とても興味がありました。一九八八年の八月に夏休みを利用して、早速両親と共に姉を訪ねました。大きな古箏を抱えて鑑真号という船に乗り、二日間かけて日本にたどり着きました。初めて踏んだ日本の地は、神戸でした。山と海に囲まれている港町神戸は本当に美しくて、その時の印象は今でも胸に刻まれています。

京都での一ヶ月間は、楽しい思い出でいっぱいです。中でも初めての自分のコンサートは、その後の自分の将来を予見するような出来事でした。姉の友人が私の演奏を聴き興味を持っていただいたことがきっかけで、「伍芳古箏コンサート」が実現したのです。会場は小さな和室でしたが、まだ発表会程度の演奏経験しかなかった私にとってそれはどんな舞台よりも大きく感じられました。自分が学んだことをすべて出し切り、

無心に演奏しました。コンサートでは姉が流暢な日本語で司会を務め、日本の皆様に古箏と楽曲の紹介をしてくれました。一言も分からなかった私でしたが、その時の姉の後ろ姿は目に焼き付いています。

コンサート終了後、お客様にから数多くの温かいメッセージをいただきました。古箏が中国をイメージさせるだけでなく、心を穏やかにしてくれるという声が多かったのが印象的でした。自分の演奏でこれほど多くの拍手を浴び、お客様に喜んでいただくことを生まれて初めて経験し、喜びを噛みしめました。そして、音楽は人々の心を一つにすることを改めて実感しました。また、古箏は中国の代表的な民族楽器ですが、隣国日本ではあまり知られてないことも分かりました。

コンサートにお越しいただいたお客様の中に日本琴の安田弘子先生がおられ、共演のお誘いをいただきました。後日、「さくら・さくら」と「六段」を共演する機会を得ることができ、本当に楽しい時間を過ごさせていただきました。

中国へ帰る前には、安田先生から日本での演奏活動を考えてみないかと、お言葉をいただきました。帰国してからも京都で演奏した日々が脳裏に蘇り、日本で中国古箏を広めたいという想いが日に日に強くなりました。安田先生の応援をいただけることもあり、最終的には両親も認めてくれました。

一九九〇年一〇月末、古箏と寄り添いながら再び日本行きの船「鑑真号」に乗りました。大きな汽笛と共に船がゆっくりと岸壁を離れ、見送りにきた両親の姿が少しずつ小さくなる光景は今でもよく覚えています。頬を伝う涙に潮風を感じながら、故郷を離れた時の姉の心境はどんなものであったかをその時しみ

じみと感じました。

当時姉が住んでいた京都のワンルームマンションの小さな玄関を開けた時から、新たな姉との生活が始まりました。まず日本語学校に通い始め、毎日必死で日本語の勉強をしました。家では姉が日本語教師役を務め、日本語オンリーの厳しい指導を受けました。私の生活の面倒もみながら、少しでも早く大学に進学できることを期待していたと思います。

翌年、大学受験シーズンが到来し進路について頭を悩ましていました。そんな時、姉が立命館大学に留学している友人から話を聞いてきました。立命館大学は留学生を積極的に受け入れる国際感覚あふれる大学で、自由闊達に学べる環境が整っており、芸術やスポーツなども振興する大学と知りました。やがて決意が固まり、立命を志望することになりました。筆記試験で初めて衣笠キャンパスに訪れたとき、緑あふれる構内に目を奪われました。迷わず、この学校で勉強したいと素直に思いました。面接で立命館大学の志望理由を聞かれて、思わず「キャンパスがとても綺麗だから」と答えてしまい、面接官の苦笑を誘いました。

一九九二年の春、姉は京都大学経済学部を卒業し、丸紅大阪本社に就職したと同時に私は立命館大学産業社会学部に入学、人間文化コースを専攻することになりました。それを機会に、姉の通勤を考えて大阪に近い西宮甲子園に引っ越しました。古箏の練習がしやすい環境が良いと考え、姉は知人から一軒家を借

りることにしてくれたのです。築四〇年以上の二階建ての古い日本家屋でしたが、家賃も手頃で、私達にとっては天国のように快適な空間でした。

大学に通いながら、日本での演奏活動も少しずつ始めました。姉は忙しい仕事の合間を縫って演奏会場の下見や打ち合わせなどのマネージャー業をこなし、いつも司会まで務めてくれました。いつも私の横には姉がいて、私のことを応援し、見守っていてくれたのです。

一九九四年の末、姉から真剣にメジャーデヴューの話を持ちかけられました。姉は社会人になってから人並み以上にビジネススキルを身につけていて、実現可能な提案でした。姉の音楽事務所で演奏活動をする私を、その時二人で夢見ました。

一九九五年一月一六日、友人とスキーに行く事になり姉も誘ったのですが、スキーが苦手の姉は「今回は遠慮するわ。気をつけていってらっしゃい。」と言って微笑みながら見送ってくれました。スキーを存分に楽しんだ後、友人の車で自宅に向かう途中に交通渋滞につかまり、結果的に神戸の友人宅に一泊することになりました。姉には「今夜帰れなくなったから、明日ね」と言って電話をしましたが、それが姉との最後の会話になりました。

一月一七日五時四六分、魔物のうなり声のような不気味な地鳴りと共に、周囲が激しく揺れ始め目が覚めました。気づいたときには、周囲は跡形もなく物が散乱していました。ようやく状況が飲み込め、あわてて姉に電話をしました。しばらく話し中の信号音が流れていたので、姉はきっと誰かと電話をしている

と思いました。その後、停電と激しい余震が続いていたので、友人の家族全員でリビングに集まり様子を見ていました。

街はまだ薄暗く、周辺の状況がなかなかつかめませんでしたが、不思議に静かでした。私はひたすら姉に電話をかけましたが、相変わらず話し中のままなので一瞬胸騒ぎがしました。それから日差しが少し明るくなった頃に突然テレビがつき、阪神高速道路が倒壊したシーンを目にし、体が震え始めました。家から飛び出し友人の車で西宮甲子園の自宅に向かいました。普段なら一時間程度で行けるところをその日は五時間以上もかかりました。私の人生の中で最も長く感じる五時間でした。車で向かう途中で目にした神戸の町は、それまでと全く違う恐怖に満ちた別世界に変わっていました。煙とガスの匂いが充満し、救急車のサイレンが鳴り響き、まるで戦場のようでした。移動中も電話をかけ続けていた私は、自宅を見ることがだんだん怖くなり始めました。

昼頃にやっと自宅に到着しました。二階建て建屋が全壊し、それまで見たことがない二階の瓦屋根が地に伏せるようにして目の前に現れました。二階部分は私と姉の寝室でした。周囲では人や物が回り舞台のように動いているのに、私はただそこに立ちすくんでいました。それからどれぐらい時間が経過したのかはっきりとは記憶していないのですが、姉との対面はあまりにもつらいものでした。いつも傍にいるはずの姉がいない。もうどんなに叫んでも答えてはくれない。身を切るような痛みが体を走り、糸が切れた操り人形ように足がカタカタと震えました。

二日後には両親が中国から駆け付け、その後姉の会社の皆さんが葬儀を執り行ってくださいました。三〇〇人以上の方々が弔問に訪れ、悲しみに満ちた会場の中で両親が泣き崩れました。

全壊した自宅の中から奇跡的に古箏だけが無事に発見されました。古箏のケースを開けて無傷の古箏を見た時、姉の死が重なり心のバランスを一瞬失いました。それからしばらく古箏には触れなかったのですが、ある日姉の友人から震災翌月の二月に大阪交流センターで行われる震災チャリティーコンサートで是非演奏して欲しいと依頼を受けました。コンサートで古箏を弾き始めると、姉との思い出が走馬灯のように蘇ってきました。姉が一番好きだった古箏の名曲「雪山春暁」と「戦台風」を演奏しました。演奏中、いつものように微笑んで私の演奏を聴いている姉の姿がはっきりと思い浮かびました。これほど自分の演奏を姉に聴いてほしいと思ったことはありませんでした。演奏後は涙で何も見えなくなりましたが、大きな拍手の中で「芳芳、今日の演奏は素晴らしかったよ」と姉が言ってくれたような気がしました。そこで改めて、音楽の力を実感しました。音楽を続け、姉と二人で描いた夢を実現していく決意を新たにしました。

震災の年、私は大学三年生でした。卒業後の進路を決めなければならない時期になり、両親の理解を得て最終的に日本に残ることにしました。大学の先生や、クラスメートからも温かい応援をいただき、自分はひとりではないことを実感しました。立命館大学で過ごした月日は、私の日本での心の原点となっています。

震災から一六年経ちました。一九九六年立命館大学を巣立ち、デビューを果たした後一〇枚のアルバムを発売。今では多くの方々の応援の中で音楽活動を続けております。もちろん、平坦の道ではありませんでしたが、壁にぶつかった時、いつも心の中の姉に励まされています。

二〇一一年三月一一日東日本大震災が起こり、阪神淡路大震災を上回る被害に心が痛みました。私自身も震災のフラッシュバックに苦しみました。しかし、自分が被災者であった時に受けた多くの温かい支援を思い出し、今度は恩返しする番と思っています。私にできることは、音楽しかありません。音楽を通じ今後様々な形での復興支援を模索していきます。

毎年、一月一七日がくる度に、一瞬のうちにあの日に舞い戻ってしまい心が苦しくなります。震災で受けた心の傷は生涯癒えることないでしょう。それでも、ひた向きに明日に向かって生きれば、その彼方にきっと希望の光を見出すことができる。今では、そう思っています。

「お姉さん、今年のルミナリエはきっと綺麗ですよ。」

（一九九五年度立命館大学産業社会学部卒業・中国古箏奏者）